

# 川崎病治療法 3 群プロスペクティブ・スタディの follow up 及び臨床データの検討に関する小委員会

浅井 利夫 (金沢医大)  
多田羅勝義 (東京女子医大第二病院)  
藺部 友良 (日赤医療センター)  
原田 研介 (日大板橋病院)

## 顧問

柳川 洋 (自治医大)  
草川 三治 (東京女子医大第二病院)

## 1. はじめに

前厚生省川崎病研究班(班長:草川三治)が行った3群の薬剤に対する治療効果についての研究は本症に対する初めての前向き調査のプロジェクトで、本症の治療法の確立という点で重要な意義をもつ研究である。従って本研究班(班長:川崎富作)としてはこの研究を引き継ぎ、今までに登録された症例(特に冠動脈後遺症例)の follow up と集められた多数の臨床的資料を分析、検討し、本研究を更に有意義なものたらしむべく、本小委員会を作り調査検討したのでその成績を報告する。

## 2. 研究目的

### a) 冠動脈後遺症例の follow up スタディ

前研究班が昭和56年7月より同58年2月までに行った川崎病治療法プロスペクティブスタディの方法及び結果はすでに日本小児科学会雑誌87巻:12号:P2486~2491に報告されている。この報告では治療効果の判定は30および60病日における冠動脈拡大性病変の出現頻度を比較することにより行なわれた。しかしわれわれはこの研究を60病日の時点で結論づけ、打ち切るのは早過ぎると思え、更に長期に亘り冠動脈後遺症例を追跡することにより、今までにない有意義なデータが得られるものと判断し、今後も可能な限り長期間にわたり経年変化を年1回調査することに決定した。この目的でまず本年度は発症1年目における冠動脈病変の残存率を3群について調査した。

### b) 登録された症例(306例)についての臨床所見及び検査成績の解析

川崎病の臨床症状の出現頻度および検査成績については昭和46年度厚生省「小児MCLS研究班」が多数例について調査検討し、その時の報告書である「小児MCLS全国調査成績補遺(診断基準別再分類および要因調査成績)」に詳しく記載しているが、前回の調査よりすでに十数年経過しているので、臨床像や検査成績を比較する意味においても、また病初期の検査成績から冠動脈病変の予知についてその可能性を検討する意味においても、今回の多数例につき、冠動脈正常群と異常群に分けて解析検討した。

### 3. 方法及び対象

#### a) follow up スタディ

前回の研究協力8病院に冠動脈後遺症例の発症1年後の冠動脈病変の経時変化を問い合わせ、返送されたデータに基づき、発症1年後の冠動脈病変の残存率を3群の治療法に分けて検討した。

#### b) 臨床症状及び検査成績の解析

今回のプロスペクティブスタディの対象となった306例を各病日ないし各病週毎に臨床所見及び検査成績について、各症例の個人票のデータをNEC社PC 9801やアップル社のコンピュータに入力し、治療法や冠動脈病変との関係を検討した。その中で今年度は臨床症状の発熱、発疹、眼球結膜充血、口唇所見、口腔内発赤、頸部リンパ節腫脹、硬性浮腫、皮膚落屑の8項目について、出現頻度、出現及び消退病日を全症例、冠動脈正常群、同異常群の3群に分けて集計、検討した。

### 4. 結果

#### a) follow up スタディ成績(表1)

対象となった3群合計306例中60病日に異常所見を残していたものは計58例(この中で冠動脈瘤症例は28例)であった。これらの後遺症のあった58例の30病日以後服用していた抗血栓剤の内訳はアスピリン( $10\text{mg/Kg/日}$ )49例(84%)、フロベシ(2 $\text{mg/Kg/日}$ )7例(12%)、アンギナール( $5\text{mg/Kg/日}$ )1例(2%)、フロベシとアンギナールを併用していたもの1例(2%)であった。表1は3治療群の病日別冠動脈異常所見出現頻度(括弧内は冠動脈瘤症例)を示したものであるが、発症1年後においてもアスピリン群が他の2群に比して残存率が低かった。しかし、この成績は従来まで報告されて来た本症に対するアスピリン治療の冠動脈瘤症残存率(5~20%)に比して著しく低い印象であり、その理由については今後更に検討する必要がある。

#### b) 臨床症状の検討成績

対象の306例中、個人票の記載不備例などを除外した289例について検討した。冠動脈正常群とは、60病日までの間常にエコー所見が正常であったものであり、異常群とは経過中1回でも冠動脈拡大性病変を示したものとした。表2は全例(289例)、正常群(186例……64%)、異常群(103例……36%)の臨床症状8項目の出現率、症状の出現及び消退病日(平均と標準偏差)を示したものである。これによると冠動脈正常群と異常群との間に主な臨床症状の出現症日および出現頻度には差がみられていない。しかし症状の消退病日についてみると異常群の症状消退が遅れる傾向がみられた。図1~図3は発熱の項目のみグラフで表示したものである。これによると異常群が正常群より発熱持続日数が長いことが伺われ、これは従来からの説を裏付ける結果であった。

表 1

## 病日別冠動脈異常所見出現頻度

| 治 療 群 \ 病 日                             | 入 院 時<br>(2～18病日) | 1カ月             | 2カ月             | 1年             |
|-----------------------------------------|-------------------|-----------------|-----------------|----------------|
| Aspirin群<br>101例                        | 16(1)<br>15.8%    | 22(8)<br>21.8%  | 11(4)<br>10.9%  | 1(1)<br>1.0%   |
| Flurbiprofen群<br>104例                   | 13(3)<br>12.5%    | 40(21)<br>38.5% | 27(15)<br>26.0% | 12(7)<br>11.5% |
| Prednisolone)<br>Dipyridamole)群<br>101例 | 14<br>13.9%       | 27(12)<br>26.7% | 20(9)<br>19.8%  | 9(7)<br>8.9%   |

( )内は冠動脈瘤

表 2 主要症状の出現頻度、出現及び消退病日 (M±SD)

3群プロスペクティブスタディ (1981~1983)

|           | 全<br>(N=289) |          |          | 冠 動 脈 正 常 群<br>(N=186) |          |          | 冠 動 脈 異 常 群<br>(N=103) |          |          |
|-----------|--------------|----------|----------|------------------------|----------|----------|------------------------|----------|----------|
|           | 出現頻度         | 出現病日     | 消退病日     | 出現頻度                   | 出現病日     | 消退病日     | 出現頻度                   | 出現病日     | 消退病日     |
| 発熱 (5日以上) | 97 %         | 1.1±0.4  | 9.9±5.5  | 97 %                   | 1.1±0.5  | 8.3±3.4  | 96 %                   | 1.1±0.4  | 12.8±7.1 |
| 発疹        | 90 %         | 2.8±1.3  | 8.3±3.6  | 89 %                   | 2.8±1.2  | 7.8±2.6  | 91 %                   | 2.7±1.3  | 9.1±4.9  |
| 眼球結膜充血    | 93 %         | 3.1±1.3  | 10.8±4.6 | 93 %                   | 3.2±1.2  | 10.3±4.2 | 93 %                   | 3.0±1.3  | 11.7±5.2 |
| 口唇発赤      | 91 %         | 3.3±1.4  | 15.4±7.8 | 96 %                   | 3.3±1.4  | 14.5±6.8 | 83 %                   | 3.3±1.5  | 17.0±9.2 |
| 口腔内発赤     | 78 %         | 3.5±1.6  | 11.1±5.1 | 80 %                   | 3.5±1.5  | 10.6±3.7 | 76 %                   | 3.5±1.6  | 12.1±6.9 |
| 頸部リンパ節腫脹  | 76 %         | 3.4±1.9  | 11.0±7.1 | 76 %                   | 3.4±1.8  | 10.1±5.1 | 76 %                   | 3.6±1.9  | 12.5±9.4 |
| 硬性浮腫      | 72 %         | 4.0±1.6  | 9.7±4.0  | 74 %                   | 4.0±1.7  | 8.9±3.3  | 70 %                   | 4.1±1.6  | 11.0±4.9 |
| 皮膚脱落      | 89 %         | 11.5±3.5 | 25.6±7.0 | 87 %                   | 11.2±3.2 | 24.6±6.5 | 91 %                   | 11.9±3.9 | 27.1±7.6 |

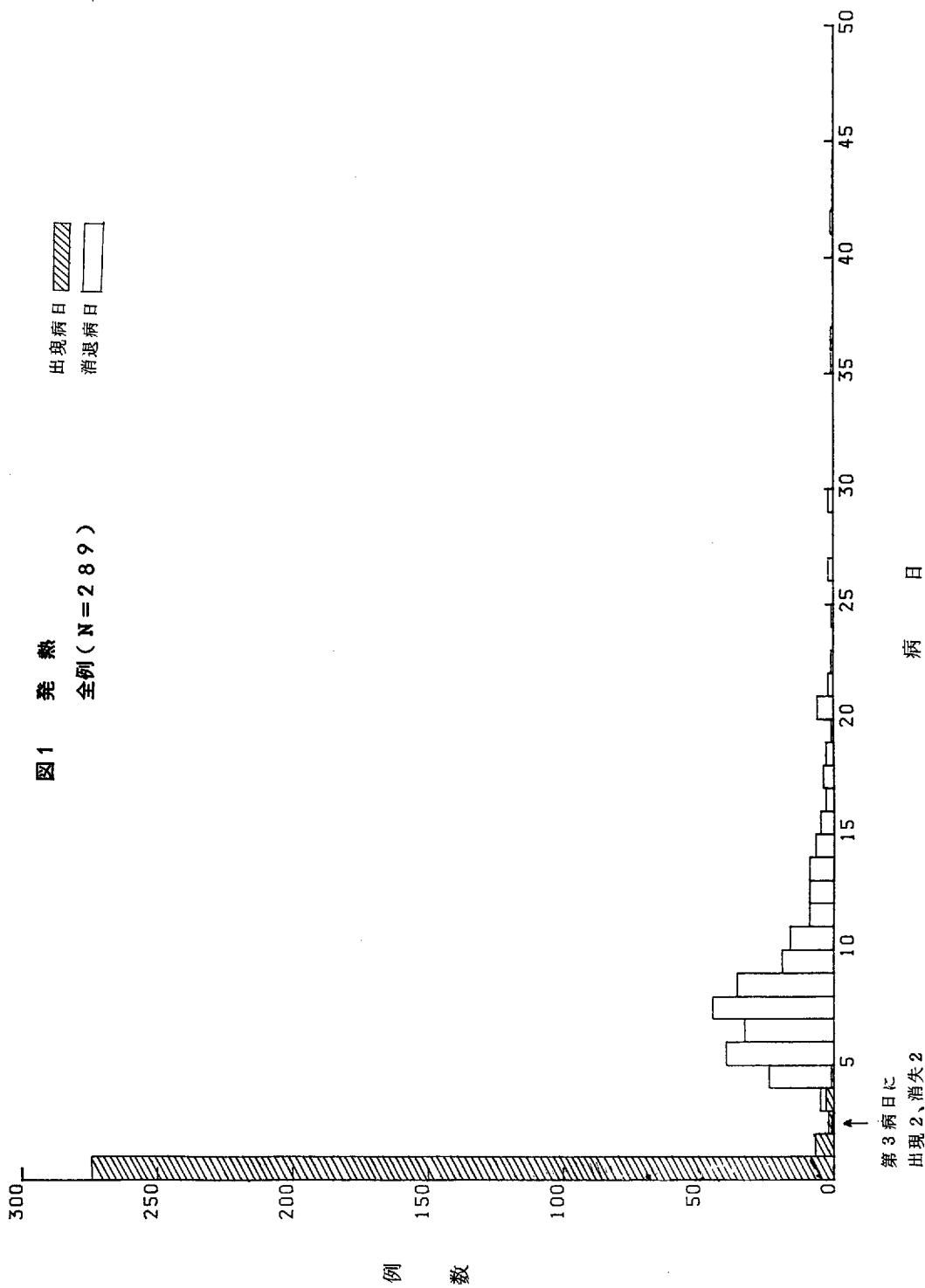


図2 発熱  
冠動脈正常群 (N=186)

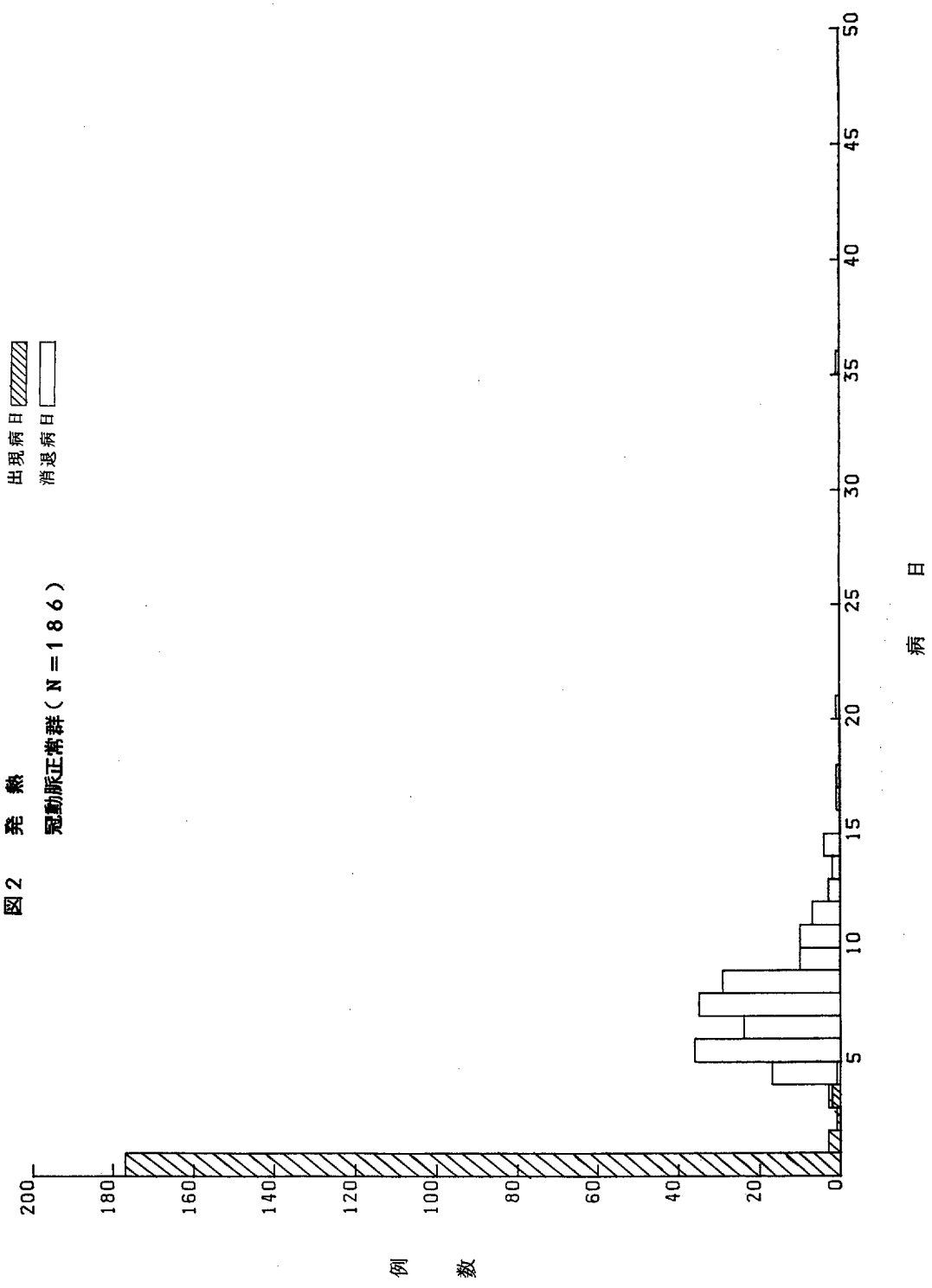
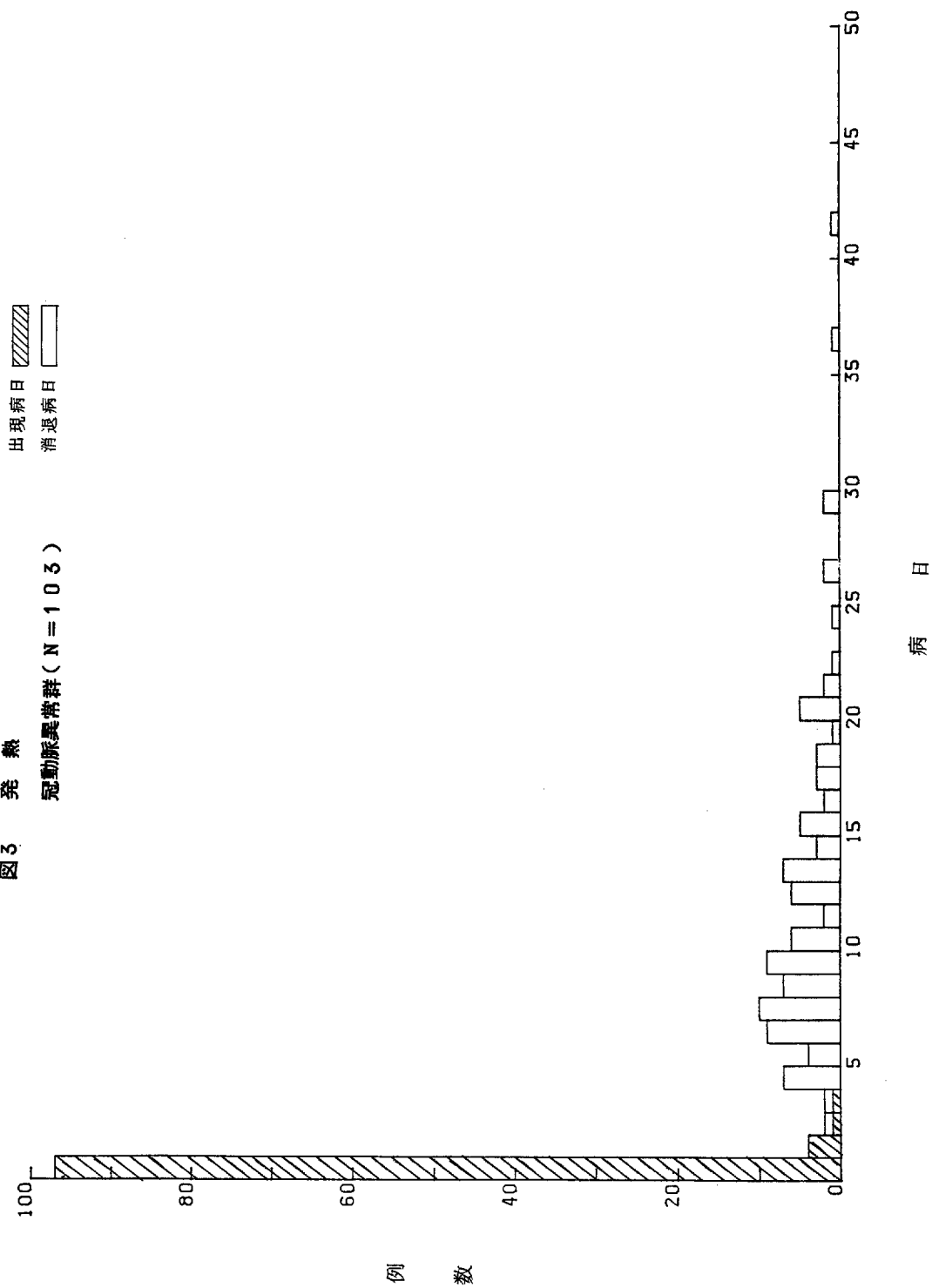
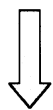


図3 発熱  
冠動脈異常群 (N=103)





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 1. はじめに

前厚生省川崎病研究班(班長:草川三治)が行った 3 群の薬剤に対する治療効果についての研究は本症に対する初めての前向き調査のプロジェクトで、本症の治療法の確立という点で重要な意義をもつ研究である。従って本研究班(班長:川崎富作)としてはこの研究を引き継ぎ、今までに登録された症例(特に冠動脈後遺症例)の follow up と集められた多数の臨床的資料を分析、検討し、本研究を更に有意義なものたらしむべく、本小委員会を作り調査検討したのでその成績を報告する。